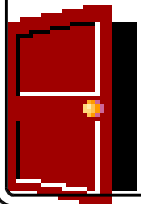


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



# 読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和5年1月27日 文責 渡邊

## 自ら「行動」することの大切さを目指す！

以前紹介した『子どもたちに民主主義を教えよう 対立から合意を導く力を育む』（工藤勇一 苫野一徳共著 株式会社あさま社 2022年10月）に次のような文が載っていました。

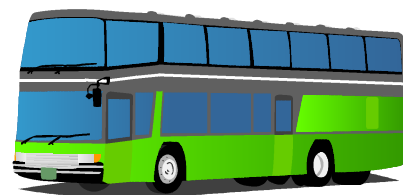
工藤「(前略)行動ならすぐに変えられるじゃないですか。たとえば日本の学校は「思いやり」の教育ばかりしますが、電車やバスで席を譲る人は昔より少なくなっていると感じています。僕の知り合いが最近アメリカに引っ越したんですけど、小さなお子さんを連れてマンハッタンでバスに乗ったら、3、4人が一斉に席を譲ろうとしてくれて、『次で降りるから大丈夫です。ありがとう』と言ってバスの後方に移動したら、そこでも3、4人が席を譲ろうとしてくれたそうです。」

苫野「素敵ですね。」

工藤「それが日常なんですね。ではなぜ心の教育を重視している日本では席を譲る人が少ないのでしょうか。そもそも席を譲るかどうかさえ考えているとは思えない人もいます。考えてはみても『断られたら浮いてしまう』とか『目立ってしまう』、『偽善者だと思われたくない』などの不安が腰を重くさせているのかもしれない。」

苫野「なるほど。どれだけ心の教育をやっても、行動が伴わないんだったらあまり意味はないですね。」

工藤「はい。むしろ行動よりも心の方を重視してるんです。でも席を譲る行為にそんな理屈どうでもいいじゃないですか。大事なのは、困った人がいたら助ける行為をするか、しないかでしょう。(後略)」



これからの時代を生きる子供たちには、「自分で考え、判断し、行動する力」が求められると考えます。心の中は誰も見ることができません。例えよいことを考えていても具体となって現れなければ理解してもらうことは困難です。

令和4年12月『静岡県PTA新聞』に第10回「小さな親切」作文コンクールの入賞作品が載っていたので紹介します。

ぼくの背中にある勇氣 中学3年生

朝早く友達と通学路を歩いていると、いつもは静かなゴミ捨て場に人影を見つけた一人はおばあさんで、もう一人は僕の学校の高等部の先輩だった。少し面倒くさそうな予感がしたが、やはり二人はカラスに荒らされたゴミ捨て場の掃除をしていた。高校の先輩は学校のちりとりを持っていたので、一度学校に行き、戻ってきたようだ。僕はためらったが、そのまま横を通り過ぎるわけにもいかないのだから、友達と「手伝います」と声を掛け、掃除を手伝った。その日の朝の会で、僕たちの行動が紹介された。名前こそ出されなかったが、おばあさんが学校へ連絡をしてくださったそうだ。僕は少し恥ずかしかったが、あそこで通り過ぎずに掃除を手伝った自分をほめたいと思った。

カラスによるゴミ荒らしは決まってることなので、今度は僕が友達を誘ってゴミ捨

て場の掃除をすることにした。友達も快く引き受けてくれた。そうして僕たちは、毎朝の掃除を習慣として続けていた。すると、その活動に学校の近所の誰かが気付いてくれたようで、また朝の会で紹介された。同級生の間でも話題になっていたようだ。色々な人から、「すごいな」「えらいな」と褒められた。

しかし、僕はあまりいい気がしなかった。「本当にこれは褒められるようなことなのか」と思ったのだ。初め、ゴミ捨て場の掃除を手伝った時は、ためらいはあろうと「すべき」と思ったから手伝いをした。しかし、今、僕のしている行動は、褒められただけの上っ面だけの行動できないか。いわゆる「偽善」なのではないか、と思ったのだ。そして、そのときから、僕はゴミ捨て場の掃除をしなくなった。

掃除を辞めた週、いつもより一本遅いバスで登校すると、ゴミ捨て場に人影があった。友達が掃除をしてくれているのだろうと思ったが、それだけでは無かった。そこで友達と掃除をしてくれていたのは、今まで見たことのない顔の人たちだった。次のゴミの日には、また違う人が二人ほど、そして翌週になると近隣の小学校の先生まで手伝ってくれるようになった。僕たちの行動が周りの人たちの気持ちを動かしたのだと思った。

僕は自分が悩んでいることが、どうでも良いことだと気付いた。善だろうが偽善だろうが、僕たちが行動を起こしたことに意味があるのではないか。偽善を気にせずやっつけてのける「勇気」が大切だったのではないか。そう思いながら、掃除を手伝った。

今、僕の背中の通学カバンには、45リットルのゴミ袋が入っている。学校がくれるようになったので必要ではないのだが、いざというとき、きっとこのゴミ袋が僕に勇気をくれる。そして、その「勇気」が、僕や周りの人たちの気持ちをつないでくれると信じている。

また、金澤泰子(書家)さんは、ある雑誌(出典不明)で次のようなことを述べていました。「子供の力を信じ、最後までやらせてあげること。この点は非常に大事だと思っています。周りをみると、大人がやたらとやってあげている場面に遭遇することがあります。時間をかければ普通にできることであっても、大人は遅いと感じてしまうとすぐに手を出してしまいがちです。それだと、子供は達成感を感じることはできません。「できた!」という喜びに加え、それを褒めてあげれば「もっとやりたい!」という意欲にも繋がります。」

ここが大切だと私は思いますが、いかがでしょうか?子供たちは、子供たちなりにいっぱい考えています。でも、行動できないでいます。それはなぜか?そこには、「失敗」することへの恥ずかしさや恐れといったものが強く働くからではないでしょうか。そのことが起因として、子供たちの行動を制限してしまうのだと思います。また、私たち大人も「正解」を子供たちに強く求め過ぎてはいないでしょうか。まずは、その子にとって何が大切なのかを見極め、それに対して失敗を恐れず行動することのできる環境を構築することが大切だと考えます。

私たち職員も、桑村小学校の学習環境の「強み」を働かせながら、子供たち一人一人に寄り添い、彼らの個性や良さの伸張に努めていきます。ご家庭におかれましても、お子さんの「行動」を温かく見守っていただき、時には大いに褒め、励ましていただければと思います。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(1月27日号)を読んでの感想

( )年( )